

## グループにおける「相互的投影同一化」について

—— トレーナーによる依存基底的思想のエナクトメントの一事例 ——\*

Mutual Projective Identification in Groups: A case describing  
the trainer's enactment of the basic assumption of dependency

MED HAFSI\*\*

### ABSTRACT

The concept of projective identification (PI), which was initially conceived by Klein as a defense process used by the infant against the death instinct and a means to make order in his/her object relational world, is now used to explain human interactions in various sittings. For instance, there are numerous group studies using the concept of PI to understand such roles as leadership, scapegoat, group mentality, and so on. However, most of the authors have confined themselves to a mere application of the concept, providing no discussion on how PI, initially an individual process, spreads to the group-as-a-whole to become a group process. Therefore, based on Bion's (1961) group theory, the author has tried to discuss the conditions and the process leading to group or mutual projective identification (MPI), through a description of how the basic assumption group (baG), especially the basic assumption of dependency (baD), develops. He concluded that the emergence of baD is the result of 1) a mating of the members' personal dependency "pre-conception" (Bion, 1962) with a "negative realization", 2) the combination of the members through their respective "dependency valency" and, 3) the formation of a sort of "emotional channel" linking members together, and 4) the members' resorting to MPI to evacuate their baD needs and desires, and as a result, 5) the transformation of individual dependency "pre-conceptions" into baD, namely, as a group fantasy. As illustration, the author presents a clinical vignette from a 6-session D-group, in which the group resorted to MPI. The group projected its baD needs into the trainer to protect them from him, and, as put by Bion (1961), make him enact these needs on the behalf of the whole group. Following a feedback from one observer, the trainer could free himself from the group's unconscious manipulation and be able to confront the group with its manipulative behaviour and the baD, and consequently, help it to get out from the impasse in which it had been trapped for two successive sessions.

**Key Words:** Projective Identification, Basic Assumption Group, Group Mentality, D-group

### I. 研究の目的

多くの分析的指向の思想家によって示唆されているように、投影同一化 (Projective Identification以下、PI) という概念は、精神分析における、無意識の概念と並ぶ最も実り多い概

\*On Mutual Projective Identification: Enactment of the basic assumption of dependency by the trainer

\*\*Received September 29, 2006.

念と言っても過言ではない。Melanie Klein (1946) によって提唱されて以来、PIは、Klein派の分析家 (例えば、Segal, 1973; Rosenfeld, 1987; Bion, 1967; Meltzer, 1992) だけではなく、非Klein派の分析にも広く使用されてきた (Spillius, 1988)。その結果、それを明確にしたり、さらに展開させたり、広げたりするための多くの臨床的かつ理論的研究が行われてきた。これらの研究を記述することは、本研究の範囲を超えることになるので、ここで、グループによるPIに限定する。従って、本研究の目的は、まず、1) PIの定義を行った上で、グループの力動を理解するのにPIを用いた主要な研究を網羅し、それにおける問題と、2) トレーナーがPIの対象 (ターゲット) になった時のあるD-グループを事例として呈示し、Bionによる諸理論からの考察を行うことである。

## Ⅱ. グループと投影同一化

Klein (1946) によれば、元々PIは、幼児の内部における死の本能の存在によって引き起こされる。死の本能のため、誕生して間もなく幼児は、内部から攻撃的衝動、激しい不安、および全滅への恐怖といった感情を抱くので、これらの感情や感覚から自分を守るために、防衛機制としてのPIに頼るようになる。乳児は、これらの「悪い」かつ望ましくないものとして見なされる感情、あるいは悪い自己部分を分裂させ、それらを対象 (部分対象としての乳房、または全体対象としての母親) に投影し、そして、対象のものとしてそれらに同一化し、自分自身のものとして感じ続ける。この段階において幼児が自分と外部の対象 (乳房、母親) を区別することができないのである。

Klein以来、PIは多く研究者の展開の対象になった (Ogden, 1982; Hinshelwood, 1991)。文献のレビューから分かるように、PIが用いられる目的は多面的である。即ち、PIが用いられる目的は、1) 望ましくない自我部分を外部あるいは内部の対象 (の中) に排出し、押し込み、そして、危険の源として見なされるその「悪い対象」を支配したり操作したりすること、2) 良い自我部分の投影の対象になった理想対象との分離を回避すること、そして3) 内部の悪い対象から良い自我部分を守ること、「原始的投影的償い (primitive projective reparation)」によって外部の対象を改善すること (Segal, 1973)、4) 本人の体験を外部の対象に体験させ、そして対象を操作することによって本人の幻想に何らかの役割を演じさせること (Bion, 1967; Hafsi, 1993) である。

上述のPIに関する論述をグループに応用し、グループ過程、力動、現象 (例えば、スケープゴート、リーダーシップ等) を理解しようとしている試みは少なくはない (例えば、Bion, 1961; Wisdom, 1985; Roitman, 1989)。これらの殆どの試みは、あらゆる心理学は、基本的に社会的心理学であるというFreud (1921) の主張及び、「グループ心理学と個人心理学の外見上の相違は幻想である。その幻想は、グループが個人心理の幾つかの側面を研究するためのよく分かる研究分野を提供し、(中略) グループを扱い慣れていない観察者にとってなじみのない現象をひときわ目立つようにするという事実の結果である」(筆者訳、p.134) というBion (1961) による陳述に基づいているのであろう。

このように、PI論を用いて、グループの心理力動を理解しようとしている研究者によれば、グ

グループにおけるPIは、単なる個人によって示される防衛的過程だけではなく、全体としてのグループ（group-as-a-whole）の心的活動の結果である。例えば、このような考えは、Bion（1961）によるグループの心的状態と「グループ心性（group mentality）」（Hafsi, 2004b）の発生との関係に関する論述にも反映されている。Bionによれば、「グループ心性」の発生は、PIによる各メンバーの貢献の結果である。同じく、Grinberg（1979）は、グループにおけるあらゆる「役割」（role）（例えばリーダー、部下、スケープゴート等の役割）がPIの所産であると述べている。また、Horwitz（1983）も、これらの不可欠の機能、あるいは役割がグループに固有であり、そしてグループがPIによって、これらの特定の役割に最も適したメンバーを無意識的に選択する。これは、baGの影響の下でグループがPIを通して最も病理的なメンバーにリーダーの役割を委任するというBion（1961）の考えを反映している。

グループにおけるPIに関する文献のレビューから分かるように、多くの研究者は、元々個人を対象関係に関する概念であるPIを、そのまま単にグループに応用していることに過ぎないのである。例えば、前述したように、Bion（1961）は、baGやグループ心性が、グループ全体のPIによる「無意識的同盟」の結果であると述べているが、PIが成立する過程や、個人のPIからグループ全体のPIへの展開や、baGの発生過程については詳細に何も論じていない。従って、本稿では、PIとbaGの発生との関係を記述することを通じて、これらの論点について論じたい。

### Ⅲ. 投影同一化とbaGの発生

Bion（1961）によれば、グループは構成されると、同時に見られる2つの異なった心的活動が体験される。すなわち、baG（闘争・逃避「baF」、依存「baD」、つがい「baP」）と「作動グループ（work group=WG）」である（詳しくは、Hafsi, 2003を参照）。Bionは、baGの形成が、各メンバーの「原子価（valency）」による寄与とグループのPIによるものであると述べているが、baG、原子価とPIとの相互作用については、何も論じていない。従って、本稿では、それについて、一つの論説を提案したい。

Bion（1961）が述べているように、メンバーによってグループは、母体のように体験される。そしてその体験によって早期の対象関係とその特有の恐怖、不安と防衛機制が復活される。このような類似論を更に展開すれば、メンバーにとってグループに初めて加入することは、誕生と類似した体験であると考えられる。即ち、両体験の場合も、主体（乳児とメンバー）はアイデンティティ喪失を感じる。乳児はその「胎児性（foetality）」、メンバーはその「個人性」の喪失を体験するということである。また、乳児が対象に対して依存しているように、メンバーも初期の段階にグループ全体に対して完全に依存し（Shepard and Benis, 1956）、乳児のように、メンバーもグループに対して様々な期待（Anzieu, 1984）、あるいは、「前概念作用（pre-conception）」（Bion, 1967）を抱きながらグループへの参加を望む。前概念作用の内容は、依存、闘争、逃避とつがいに分類される。前概念作用の内容は本人の原子価のタイプによる（Hafsi, 2006）。例えば、依存の原子価を持ったメンバーは依存を反映する前概念作用を抱くことが比較的が多いと考えられる。ここで、baDを例として用いて、PIとbaGの発生との関係について論じたい。

感情的導管

MPI

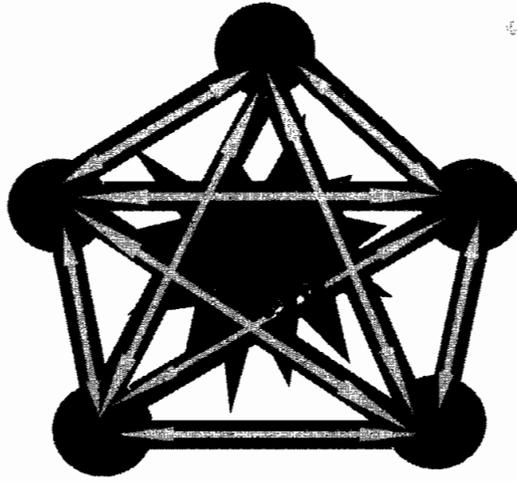


図1. 感情的導管の形成とbaDの発生

言うまでもなく、これらの前概念作用が常に満たされる、あるいはBion (1962) の言うように、「否定的実感」(negative realization) (Bion, 1967; Hafsi, 2002) と繋がるわけではない。図1に示されているように依存の前概念作用の場合は、グループに加わると、メンバーが、他者の中で依存的欲求を表現したり、満たしたりすることの困難に直面し、欲求不満を体験する。これによって、メンバーらは、依存原子価によって結合し、原始的な防衛過程としてのグループ凝集が生まれる。このような結合によって、メンバー達は欲求不満に伴う不安、絶望感、喪失感、孤独感、不安を回避することができ、全体としてのグループという心的実在と「グループ心性」(Bion, 1961) を生み出す一種の「感情的導管」がメンバー間に形成される。このような「感情的導管」によって、メンバー間や全体としてのグループのPIによる無意識的コミュニケーションが可能になる。PIの成立にはこのような感情的導管が不可欠な条件である。

図1に示されているように、感情的導管を通じて、グループは、「相互的投影同一化 (mutual PI、以下MPI)」に頼り、メンバーらが望ましくない、あるいは「悪い自我部分」や「良い自我部分」をお互いに投影し、投影された部分に相応しい反応を互いに引き起こす。その結果、個人とその寄与を「匿名化」し、グループの存在を強化させる、無意識的なコミュニケーション・ネットワーク、あるいはBion (1961) の言う「グループ心性」が形成される(図1参照)。

図1に示されているように、baGは、上述の過程の所産であると考えられる。baDの場合、まず、依存の前概念作用によって、グループは、依存的欲求が、治療者、トレーナー等の中心的な人物、またはグループ自体によって満たされるように努める。しかし、何らかの理由のために、このような欲求が満たされなくなった(前概念作用が否定的実感と繋がる)場合、グループは、欲求不満を体験するようになり、MPIを用いて、次のような処理を試みる。第1に、グループは、依存的欲求を、必要な「良い自我部分」として見なし、欲求不満の源である治療者、リーダー、グループ全体に対して繰り返し依存満足を強く要求し続け、baDを維持していく。第2に、グループは、欲求不満の源の影響や圧力によって、望ましくない「悪い自我部分」として、baDを外

部へ排出する。後者の場合、グループはbaDを、グループの要素として否認し、分裂 (split) させ、外部対象へ投影 (MPI) し、そしてWGか、別のbaG (baF、baP) へ移る。MPIのターゲットになる対象は、外部のグループまたはサブグループや、グループのメンバー、あるいはグループ内のスケープゴート等である。MPIが成立すると同時に、グループは、MPI対象をグループから切り離し、投影された内容に相応しく振る舞うように操作したり、批判を浴びさせたりする (Hafsi, 2004b)。

一方、グループは前者を選択した場合、すなわち、baDをグループの存続のための不可欠かつ良い自我部分として見なした時、様々な手段を用いて (Hafsi, 2004b)、baDを保護しようとする。例えば、グループは、baDとその典型的な要求を分裂させ、baDに抵抗する中心的な人物 (治療者等) に投影し、一時的にその人にそれを「預ける」、あるいは委託する。このようなグループ対策には2つの目的がある。第1、グループは、無意識的な操作によって、その人物に依存する役を委任し、そしてその人の世話をやくという作業に没頭することによって、グループが無意識的にWG活動のふりをする (疑似WG)。第2、グループはその人物が、依存欲求に同一化し、それを自我部分として (取り入れ) 統合し、その重要性を認め、促進するように、本人を無意識的に操作する。どちらの場合も、グループの無意識的な意図は、変化を回避することである。前者の場合、グループは変化しないために変化を見せかけ、後者の場合、一人のメンバーを変化させることによって状況を維持しようとしている。以下は、後者の目的を目指したグループの臨床事例である。

### 臨床事例

グループは、心理学科の学生14人のメンバー (8人の男性と6人の女性)、トレーナーとしての筆者、および2人の観察者 (男女) によって構成されていた。グループへの参加は、心理学カリキュラムの一部と「認定心理士」資格に、必要な単位である。グループは、筆者による6セッション (1回80分) になるD-グループのタイプである (Hafsi, 2000; 2002; 2004a)。

#### 第1セッション

Trによる説明が終わると、10分以上の沈黙が続いた。その間にTrは介入し、グループが今このグループ体験や関心を持っていることについて自由に話し合うというグループの基本的な作業について告げたが、介入には効果がなかった。グループは沈黙を保ち続け、咳、溜息、鼻すすり、くしゃみ、ストレッチ (手足を伸ばすこと)、頭をかくこと等のようなプロトメンタル的 (protomental) 行動 (Hafsi, 2003) に頼って、バーバル・コミュニケーションが全くなかった。明らかにこのような状態に耐えることができなかったG夫は、ストレッチしたり、左右をちらっと見たりした後、手を挙げ、(グループの暗黙の許可を得たと感じたようだったので) 話し始めた。

**G夫：**「...みんな同じことを考えていると思います...何をすればいいのか、分かりません...しかし、何かを始めないと、...この沈黙がもう嫌ですね。グループは暗過ぎる。(そして、H夫に向かって) どう、何か提案がない?何でもいいよ。この沈黙を止めてほしい」。

**H夫**：「...ないねえ。提案何か誰も持っていない違うか?...こういう雰囲気でも誰も発言したくないと思うよ。」

**G夫**：「...先生 (Tr) に提案を求めるのはどうですかね?...先生の方が僕らよりグループについて知っているはず...教えられるために、僕らはここにいるんじゃないかな?...」。

**D子**：「...先生は私達を助けると思いません...私達が単独で何もできないと分かっていますので、本当に私達を助ける気があったら、頼まれる前にやっているといます... (Trに向かって) 違うかな?。」

**Tr**：「...グループが、私を過度に評価しているんですね...何でもできるし、何でも知っていると思われているようですね。しかし、皆と同じように、私はこのグループに会ったばかりですから、何も知らないのは当たり前です...また、このグループがここで何をすべきかを分かりませんし...最初に説明したように、これらの問題について考えるのは、グループ自体です...。ここで、私の役割は、グループの内で起こっていることを理解するために、グループを助けることだけであって、グループの代わりに考えたり、グループに指示を与えたりすることじゃないんです...」。

**D子**：「(皮肉っぽく) つまり、私達がだれにも頼ってはいけません...他の講義と違いますので、私たちはすべてを自己でしなければならぬんです...」。

このように、グループはTrの解釈的な介入を、Trが自助を望んでいて、依存を望まないというように理解した。その結果、グループは依存が「悪いもの」であるという認知と低い自己評価によって特徴付けられる心的状態に陥った。これは「私達がここでグループについて考えて、話し合わなければならないのは分かりますが、こういう授業に慣れていませんし、出来ないし、...後、5セッションが残っていますし、何もしないで、沈黙するだけだったら、時間の無駄と思います。」というM子の陳述に反映されていた。

このようなM子の介入によって、グループは、皆が参加できるテーマを決める作業に取り組んだが、効果がなかった。このような「空回り」作業、あるいは「疑似WG」がセッションの終了まで続いた。

## 第2セッション

グループが戸惑っていたように見えたので、Trは、規則が前回と同じということを告げるが、グループはまた長い沈黙に沈没 (突入) し、前回のプロトメンタルな行動を除けば、グループが活動している気配がなかった。グループは、Trが介入し、その痛ましい状況から助けてくれるのを明らかに期待していた。従って、グループの期待に応じず、Trは介入し、グループをそのbaD活動に直面させた。それによって、グループに絶望感が引き起こされ、グループの「無意識の同盟」(Anzieu, 1984) がさらに強化され、疑似WGが再び発生した。恩師からの指導や教祖からの祝福を待っている弟子や信者のようにTrを見つめ続けていたG夫は突然、失望した声で沈黙を破り、自己紹介をするのを提案した。皆はG夫の提案に同意し、時計回りで自己紹介をし始めた。各自が開示した空しい情報 (個人名と学科名のみ) とそれに対する反応の無さから見れば、

メンバーが互いに全く興味がなかったことは明らかだった。何れにせよ、グループは、あまりにも活発的にその自己紹介という作業に関与していたので、何かが変わったかのようにTrには見えた。このような突然の変化に対して、Trはグループからの漠然とした疎外感や無力感を感じ、グループに何が起きているのか、どのように（治療的に）反応すればよいのか戸惑っていた。さらに、Trは、教員やトレーナーとしての機能が麻痺し、メンバーの敵意によってグループを頼りにできないという事実と直面するようになり、出られる可能性のない行き詰りに嵌ったような感覚を体験したので、介入を控えることにした。

その間、Trは徐々にグループを、協力的になろうとしないだけでなく、基本的規則やグループの行動の意味を理解できない未熟な存在として感じるようになった。従って、D-グループの原則に反して、小学生に教える先生のように抵抗や戸惑いがなく、Trは、グループを救うためのつもりで、再びグループの規則やグループの目的を説明したり、質問に回答したり、話し合いのテーマの例を示したりした。

各セッション終了後に行われるレビューミーティングの時に、このような異常な態度や行動に気付いた1人の観察者は、本セッションにおいて「Trが、自分の子供の世話をしていた父親のような感じだった」と語った。このような感想は、Trの自己愛へのストレートパンチのようなものだったと同時に、Trに、その感想を支持するような自由連想をも引き起こした。介入を控えている間にTrは、メンバーらが自分の息子と同じ歳であること、そして一般的に若者が、グループにおける心理的事象に気付いたり、それについて考えたり、各自の言葉で他者に伝えたりするような知的、精神的作業を行うのに未熟すぎるといった幻想的な思考を抱いたことを連想したのを思い出した。それによってTrは、無意識的にグループの幻想、あるいはbaDにおいて役割を演じていたことに気付いた。つまり、Trは、グループのMPIとそれに対する自分自身の「逆投影同一化(counter-projective identification)」(Grinberg, 1979)になっていたという洞察を得て、次のセッションに見られるように、それをグループ全体の理解に活かしている。

### 第3セッション

グループは前回のような疑似WGを示し、行き詰まりを感じた時に、長い沈黙に陥った。その間に、Trは、グループがこのような状況に耐えられないのではないか、この状況が続くと、グループが最後まで何もできず、そして何も学習しないのではないかと心配し、介入しなければとプレッシャーを感じた。しかし、前回と異なってそのプレッシャーに応じることを抑えた。なぜならば、前回において得た洞察によって、Trはそのプレッシャーを、グループのMPIの結果であり、目的がbaDをTrに体験させ、そしてグループの依存要求を満たす万能的なトレーナー、あるいは父親の役割を演じさせることとして理解できたからである。従って、TrはグループのMPIを段階的に(Hafsi, 1993) コンテイン(Bion, 1970)していくことにした。即ち、Trは、まず自分の中に投影された依存欲求を、グループの自我部分として識別し、それをエナクトせず、それに耐えていき、そして最後に、それを十分にコンテインしたと感じた時に、タイミングを図り、それをグループに解釈として返すことにした。Trの介入によって、グループは、「出来るだけグループの在り方、進み方について、皆で決めるべきだが、行き詰まった時にTrの力を借りる」という結

論に達した。そして、セッションの終了時間が近づいていたので、グループは、その結論の内容を次回に活かすことを決めた。

### 結論と考察

グループ現象を理解するのにPIを用いている研究が多い。しかし、これらの研究はグループ現象としてPIを記述しているが、具体的に、グループにおけるPI (MPI) が成立する条件や過程についてはなにも触れていない。グループは、突然PIを用い、無作為に対象を選択したり、PIの目標を設定したりするわけではない。MPIは、ある不可欠な条件とグループによる複雑かつ無意識的な設計の所産である。ここで筆者は、Bion (1961) によるbaG、特にbaDの発生過程を記述することによって、MPIが成立する条件や過程を明らかにすることを試みた。

結論として、baDの発生は、①個人のグループ体験に関する依存の「前概念作用」(Bion, 1962) が否定的な実感と結ばれる (Hafsi, 2000) こと、②依存原子価によるメンバーらの結合と、③メンバーらが同時に (グループ全体として) MPIを実施するための「感情的導管」という仮説的実体の形成と、④MPIによるメンバーのbaD願望の排出と、それによる、個人の前概念作用から (グループの) baGへの変形過程の所産である。本稿においては、事例を用いて、どのようにグループがMPIに頼り、良い自我部分として見なされていたbaDをTrへ排出し、そしてそれを満たす役割をTrに演じさせる過程を描いた。

第1セッションでは、グループは、baDの下で機能しようとしたが、Trによる介入と直面化によって、グループは、自我部分としての依存願望とグループを守り、そして全滅不安、分離不安を回避するために、その願望を分裂させ、MPIによってTrの中へ排出し、「逆依存的活動」、あるいは疑似WGに行き詰まりになるまで没頭していた。第2セッションでは、無意識的にグループは、①疑似WGを通じて、無力や未熟さを示し、②MPIによってTrを操作し、投影された依存的願望に同一化させ、そしてグループの代わりにそれをエナクトさせた。その結果、baDを促進するようなグループ風土が形成され、グループはbaD活動に戻り、本当の変化、あるいはBion (1970) の言う「破局的変化」の体験を回避できた。つまり、グループの疑似WGは「変則形態 (aberrant form)」(Bion, 1961) のような変化の結果にすぎないものであった。このような異常なグループ活動の原因は、Trがグループによる初期のbaDをコンテインすることが出来なかったことと、グループによるMPIの利用にあると考えられる。

第3セッションでは、終了後のミーティングの時に得た自分の反応に関する洞察によって、TrはグループのbaDをコンテインすることができた。即ち、それをより受け入れやすい、取り入れやすいかつ耐えられやすいものに変容させ、解釈や直面化によってグループに返すことが出来た。最終的にグループは行き詰まりから抜け出し、TrはグループによるMPIの異から解放されたことになった。

### 文献

Anzieu, D. (1984): *The group and the unconscious*. Routledge & Kegan Paul, London.

- Bion, W. (1961): *Experiences in groups and other papers*. Tavistock, London.
- Bion, W. (1962): A theory of thinking. In *Second Thoughts*. Heineman, London.
- Bion, W. (1967): *Second thoughts*. Heineman, London.
- Bion, W. (1970): *Attention and interpretation*. Tavistock, London.
- Freud, S. (1921): Group psychology and the analysis of the ego. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, 18, pp. 67-143. Hogarth, London.
- Grinberg, L. (1979): Countertransference and projective counter-identification. In L. Epstein et al. (eds), *Countertransference*, Vol. 8, pp. 169-91. Jason Aronson, New York.
- Hafsi, M. (1993): The dynamic of projective identification in the therapeutic process. A case of dependency projective identification. *Memoirs of Nara University*, 21, 301-321.
- Hafsi, M. (1995): The Anatomy of Projective Identification : Detecting, containing, and confronting sexual projective identification. *Memoirs of Nara University*, 23, 301-316.
- Hafsi, M. (2000): 基底的想定グループの再考 - 「退行」から「思考」へ-。集団精神療法, 16, 75-82.
- Hafsi, M., 2002. 触媒としての特殊作動グループ -D-グループにおいてそれを取り扱うとき-。集団精神療法, 18, 35-44.
- Hafsi, M. (2003): ビオンへの道標。ナカニシヤ出版, 京都。
- Hafsi, M. (2004a): 愚かさの精神分析 - ビオンの観点からグループの無意識を見つめて-。ナカニシヤ出版, 京都。
- Hafsi, M. (2004b): 「グループ心性の多面相」- その表現、識別と取り扱いについて-。集団精神療法, 20, 32-40.
- Hafsi, M. (2006): The chemistry of interpersonal attraction: Developing further Bion's concept of "valency". *Memoirs of Nara University* (in press).
- Hinshelwood, R. D. (1991): *A dictionary of kleinian thought*, 2nd ed. Free Association Books, London.
- Horowitz, L. (1983): Projective identification in dyads and groups. *International Journal of Group Psychotherapy*, 33, 259-79.
- Klein, M. (1946): Notes on some schizoid mechanisms. In J. Riviere (Ed.), *Developments in Psycho-Analysis*. Hogarth, London.
- Meltzer, D. (1992): *The claustrum: An investigation of claustrophobic phenomena*. Clunie Press, Perthshire.
- Ogden, T. (1982): *Projective Identification and Psychotherapeutic Technique*. Jason Aronson, New York.
- Roitman, M. (1989): The concept of projective identification: It's use in understanding interpersonal and group processes. *Group Analysis*, 22, 235-248.
- Rosenfeld, H. (1987): Projective identification in clinical practice. In *Impasse and Interpretation: Therapeutic and Anti-Therapeutic Factors in Psychoanalytic Treatment of Psychotic, Borderline, and Neurotic Patients*, pp.157-90. Routledge, London.
- Schindler, W. (1966): Th role of the mother in group psychotherapy. *International Journal of Group Psychotherapy*, 16, 198-200.
- Segal, H. (1973): *Introduction to the work of Melanie Klein*. Hogarth, London.
- Shepard, H. A., & Benis, W. G. (1956): A theory of group development. *Human Relations*, 9, 415-437.
- Spillius, E. B. (1988): *Melanie Klein Today*, 2 vols. Routledge, London.
- Wisdom, J.O. (1985): Types of groups: Transitions and cohesion; emergent properties. *International Revue of Psycho-Analysis*, 12, 73-85.